

特集

ツーリズム

ナショナリズムに思う

川田順造

最近ナショナリズムということをも、さまざまな時と場で考えさせられる。

前首相の参拜もあつた昨年八月一五日の靖国神社は、過去最高の人出といわれた。地下鉄の出口から大鳥居まで、ピコを配つたり大声に訴える人たちが混み合うのは例年通りだったが、昨年は東条英機自殺未遂をめぐって「立て看板で激論していた男の一人が「お前は非国民だ」と相手を罵つていた。非国民」という言葉が人前で叫ばれるのを、戦後初めて私は聞いた。

戦争を知らない若者たちは、参道の一面で行われていた集会で「咲いた花なら散るのは覚悟、みこと散りましょ国のため」と大声で合唱していた。彼らは、私などの幼時の記憶に焼き付いている、忌まわしい神がかり軍国主義に、自分をどう重ね合わせていたのだろう。神社付属の遊就館の売店には、やはり戦争を知らない世代の、首相になりたい人が大急ぎで出した『美しい国へ』という、意味不明の題の本が山積みされていた。

西アフリカ・ダホメ王国最後の王で、植民地化のため侵入したフランス軍と戦つて死んだ王が遺した王宮を復元する、ユネスコの世界遺産事業に、私は七年來参加してきた。復元完成の昨年がその王の死後一〇〇周年に当たるので、この王を「国家英雄」としたベナン共和国の国家行事に招待された。一七、八世紀に、軍事王国ダホメは近隣の民を捕らえて火器や火薬を引き替えてフランスの奴隷商人に売り、勢力を拡張した。一九世紀末、ダホメ王国もその一部だったこの地方を征服したフランスは、この王国構成員

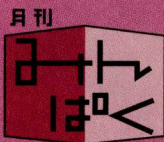
かわだ じゅんぞう／人類学者。1934年東京生まれ。日本のほか、西アフリカ、フランスでそれぞれの九年滞在調査。東西南の参照点による「文化の三角測量」を提唱。東京外国語大学名誉教授。著書、「口頭伝承論」(平凡社)、「人類学的認識論のために」(岩波書店)、「母の声、川の匂い」(筑摩書房)などがある。

以外の住民の方が多かったにもかかわらず、ダホメのフランス語読み「ダオメ」を、この新植民地の名とした。独立後も新政府は植民地の領土と名称を受け継いだので、この王国の犠牲になつた多数の人々の子孫も、同じ国家の国民とされた。一九七五年国民の融合を図るため、時の軍人大統領がダオメという国名を、現在のナイジェリアにやはり奴隷貿易で栄えた旧ベニン王国の名をとつて、フランス語読みにした「ベナン」に変えた。

植民地として区切られた日本の三分の一にもみたくない国土で、経済自立の見通しの立たないこの国が、国家英雄崇拜を通じて、国民の意気を高めようとするのは理解できる。だがそれは、かつてフランスが他の西欧列強との力関係で勝手に引いた境界を、今度はアフリカの住民が自らの意志で国境として追認することに他ならない。

昨年一〇月には民博の公開講演会で、オーストラリアという国民国家のあり方と、先住民の「国民」への統合、移民の制限をめぐる問題について考えさせられた。いわゆる先進諸国に比べて、格段に増加率が高いインドとサハラ以南アフリカの人口が今後急増し、「国家」間での移民の送り出しと受け入れの問題は、地球規模でさらに深刻化すると思われる。もちろん、日本においても。

新自由主義経済と情報・流通・移動のグローバル化、貧富の格差増大のなかで、国家、国民はどうあるべきなのか、その趨勢への情動的反応でもあるナショナリズムの過熱化にどう対処すべきなのか、人類学者の見識が問われている。



目次

MARCH 2007
月刊みんぱく

3

01 エッセイ 世界へ世界から
ナショナリズムに思う
川田 順造

02 特集 ツーリズム
「観光」という名の幻想
山村 高淑

日本人の旅の心根をめぐって
目崎 茂和

韓流ツアーから見る旅の類型
林 史樹

もう一つの観光？
—イタリアのアグリツーリズム—
宇田川 妙子
マサイ村のエンターテインメント
岩井 雪乃
住民参加型のペルー遺跡観光
関 雄二

08 未来へひらくミュージアム
戦争を語る、
オンリーワンの博物館を
齋藤 義朗

11 表紙モノ語り
ペー(白)族の民族衣装
横山 廣子

12 みんぱくインフォメーション

14 みんぱくを離れるにあたって
さよなら民博
山本 紀夫

ことは人事より始まる
大森 康宏

16 外国人として生きる
日本のいろいろな学び方
市川 哲

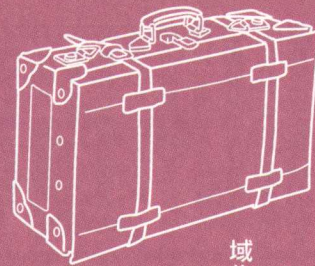
18 地球を集める
バタックのタイコ
福岡 正太

20 生きもの博物誌
トナカイと生きる
福村 哲也

22 フィールドで考える
今日もスタダコ的車窓から
高野 さやか

24 開館30周年記念 特別展
聖地・巡礼 —自分探しの旅へ—
次号予告・編集後記

ツリーズム

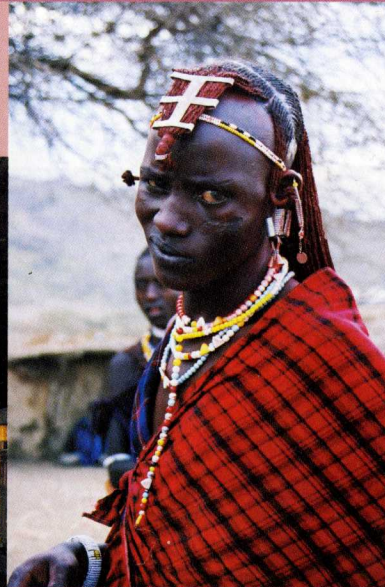


メディアの発達で入手できる情報量も増え続け、世界各地ではあらたな観光時代をむかえている。それは観光の実質とは違う「幻想」を求める旅であったりする。

人はなぜ旅をするのか。特集では今の観光の特色、さらに地域住民のかかり方の変化にも注目したい。



ソウルのショップ



マサイの戦士



チベット・ラサの巡礼者

「観光」という名の幻想

山村 高淑
(やまむら たかよし)

京都嵯峨芸術大学助教授

マンガの国、日本へ

昨年の六月末、一六歳のフランス人少女二人がパリから列車の旅を続け、ポランドからベラルーシに出国しようとしたところを、ビザ所持の理由で国境警察に拘束された。仏紙リベラシオンが伝えた小さな記事である。良くあるニュースと思いきや、旅の動機を知って驚愕した。じつは、彼女たち、陸路日本を目指していたのである！日本の漫画やビジ

ユアル系バンドの大ファンで、その発元の日本に行こうと思いついたという。朝鮮半島までの陸路は鉄道を乗り継ぎ、海は船で渡ろうと計画していたそうだ。

一方、昨年のゴールデンウィークに中国は杭州で開催された「中国国際動漫節（アニメ・漫画祭）」は、六日間の会期中に約二八万人の来場者を数えた。なんとこの数は同年の「東京国際アニメフェア2006」（会期四日間）の約三倍である。さらにこの「動漫節」ではコ

スプレ（コスチュームプレイ）イベントがおこなわれ、全中国から多くの若者が集まり大盛況を博した。中国の若者たちが、日本のマンガ・アニメの登場人物になりきっているのである！

さて、人はなぜ、旅に出るのだろうか？フランス人少女に、あえてユーラシア大陸横断の旅を決心させたものは何なのか。あの広大な中国で、若者を杭州に集寄せたものは何なのか。それは「漫画」であり「J-pop」であ

り「コスプレ」なのである。一体全体、我々はこの旅をどう理解すれば良いのだろうか？

「幻想」という物語

通常我々は観光という行為を、「本物」を見たり、「現実」を体験したりすることであると考える。しかし、じつはそうではなく、観光とは「幻想」に浸りに行くことなのである、ということをご存じの方の出来事は教えてくれる。我々はローマのコロッセオの前で、案外、建築としてのコロッセオを真剣に見ているわけではない。オードリー・ヘップバーンやグレゴリー・ペックに自らを重ね合わせたりしているのである。

この世界は、いかなれば元素が配列されただけの物質世界であり、それ自体に意味は無い。我々がそこに物語をもたせるからこそ、世界が意味をなすのであり、我々の存在も位置付けられる。我々は旅をおして「幻想」という物語に浸り、無意味な世界に意味をもたせる作業をおこなっているのである。

これは、実体の無い「神」というものを感じに行く「巡礼」と本質的に同じ行為である。一部のアニメファンが秋葉原に行くことを「アキバ詣」とか「聖地巡礼」とよぶのも、そうした旅の本質に無意識のうち

我々はあらたな観光時代に突入した。インターネットなどメディアの発達により、人類がアクセスできる情報は爆発的に増大し、観光において消費されるべき幻想はますます肥大化する。この傾向は、今後、観光資源の考え方や観光産

業の形態を大きく変えていくことだろう。上述したような若者の旅の例はそのごく一例に過ぎない。

しかし、どんなに資源の考え方や産業の形態が変わろうとも、世界に意味をもたせ、自己を認識するという、精神的欲

求としての旅の本質は、我々が人類である以上、これらも不変である。なぜなら、それは人類が自己という意識をもつたときに同時に背負った業だからである。



「アキバ詣」の女子大生。メイド服でのプリクラ撮影が旅の目的という

香港映画「恋する惑星」のロケ地。日本人にも人気の観光スポット



ローマのコロッセオ。半世紀を越えてなお根強い人気の映画「ローマの休日」のロケ地

日本人の旅の心根をめぐって

目崎 茂和

(めざき しげかず)

南山大学教授

神仙との出会いを求める

日本人の旅、とくに庶民の旅のはじまりは、世界に類例のない「伊勢参り」や「おかげ参り」にそのルーツが求められよう。日本人ばかりか、現代のマスツーリズムの起源でもある。中世末期にはじまる伊勢参りの旅は、とくに江戸時代に入り、街道・海路の整備もあり、御師(エージェンツ)に世話され、全国規模のネットワークの「講」グループによる旅のシステムである。

さらに歴史をさかのほれば、中世の法皇や上皇らの「熊野詣」、京から熊野三山や浄土世界への参詣が、日本人の旅の原風景でもあろうか。旅と寺社参詣・聖地めぐりは、日本人の旅立ちの原点である。二〇〇五年に、熊野三山を含め「紀伊山地の霊場と参詣道」として、世界遺産に登録された。いわゆる「熊野古道」自体



世界遺産登録で蘇った「熊野古道」(伊勢路・尾鷲市)

「伊勢参り」の内宮・宇治橋では、冬至の日の出が参拝できる

が指定されたのは、スペインのサンチャゴへの巡礼路について、世界で二例目である。伝統的な旅のプロセスとしての、ルートである困難・試練をとまなうような「道中」「道行」が、とりわけ認識された意義は大きい。

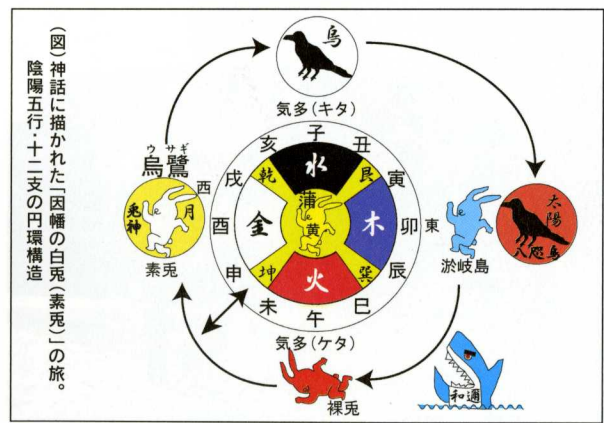
ところで「おかげ参り」の伝統は、毎年の正月の寺社への初詣・初日の出などで、その片鱗や残照がうかがえる。なお、感謝の気持ちをあらわす「お蔭さま」「お陰さまで」とは、「御蔭祭」「みあれ祭」での神の出現、神仙との出会いで、その「陰影」を見たことから、このことばの由来といわれ、日本人の旅の心性や精神性を考える、キーワードかもしれない。

神話の中の旅

『古事記』など神話に描かれた旅を分析してみると、日本人の旅の心性、精神性がより理解できるのではなからうか。大國主命の若い時(オホナムチ)の初旅といえる「因幡(稲羽)の白兔」を事例に考えてみたい。

この神話は、オホナムチの旅(東行)ばかりか、兎の旅(南行と西行)のふたつの旅が交差・重層する構造をもつ物語となっている。オホナムチの旅は、因幡の八上比売を競い合って娶るため、多くの兄弟の八十神たちにしたがって大きな袋をもち、出雲から東の因幡への旅の道中

この「因幡の白兔」の旅は、図に示すように、十二支の卯(兎・東・青)が、陰陽五行(木→火→土→金)の順にめぐり、兎神(月神)になるもので、時空間の変遷が、日・月のように東(陽・木・卯)→西(陰・金・酉)に移動する再生循環を、象徴する神話でもある。



(図) 神話に描かれた「因幡の白兔(素兎)」の旅。陰陽五行・十二支の円環構造

日本人の旅の根底には、この神話が物語るように、「熊野詣」や「伊勢参り」と同様に、若き旅で、その苦勞を乗り越え、神の加護で再生した後、この託宣を授けられるような神にもなれるという、陰陽五行の循環論的「黄泉がえり」「生きている道」精神が脈打っているのではなからうか。

韓流ツアーから見る旅の類型

林 史樹

(はやし ふみき)

神田外語大学専任講師

韓流の集客力

近年、「韓流」をテーマにした旅行がブームとなっている。ドラマ「冬のソナタ」(以下、冬ソナ)の舞台となった春川・南怡島はもちろん、ロケ地で用いられた高校まで観光客が訪れる。各地では、ドラマを記念したミニイベントが作られ、付近にはにわか俳優の写真やカレンダーを販売する店ができた。冬ソナのロケ地を中心にこのような韓国旅行を、一般に「冬ソナ観光」とよんだりもする。冬ソナ観光は、ロケ地を追うばかりでなく、一般の韓国観光もセットになつていて、ところが通常のロケ地ツアーと異なる点と考えられる。

これらの観光がもたらす経済効果は大きく、二〇〇六年一月二十九日から濟州島の西帰浦市濟州コンベンション

センターで開催された「韓流エキスポ in ASIA」には、四〇〇〇人を超える日本からのファンが開幕式に訪れたといわれる。今回の韓流エキスポだけでも、七五〇億ウォン(約九三億九八〇〇万円)が見込まれている。

実際に、韓流の集客力は絶大であった。二〇〇五年の春先にロケ地であるソウルの中央高校に行くと、正門横の駄菓子屋が韓流グッズを販売し、正門向かいでも仮設店舗でグッズを並べていた。わずか二〇分ほどのあいだに小型マイクロバスが二台もきた。ツアー客である。

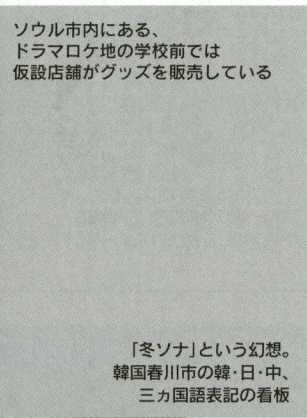
東京から釜山行きの飛行機を予約したときも、オフシーズンにもかかわらず、空席待ちといわれたことがある。春川に行くにはソウルに近い仁川国際空港が便利にもかかわらずである。少し日程をずらして釜山に行ったが、改装した釜山の金海国際空港の待合には書店があり、ポスターやカレンダーなどの韓流グッズを販売していた。後方で搭乗時間を待っていた女性グループが買い足りないといいつて、それらをあさる光景を目にした。

疑似イベントの旅

それでは、韓流ツアーはどのような旅といえるのだろうか。旅の目的には、①自分探しにつながる「オーセンティシティ

(本物のもの)の追求」と、②既知の場所を再確認する「疑似イベント」の旅があるといわれる。韓流ツアーに、憧れの人物に同化した、憧れの人物がいた場所に身を置きたいというのがあるとすれば、前もって写真などで素敵と思つた場所に自分を置くことで満足する、一種の疑似イベントといえるかもしれない。しかし、

疑似的体験をえるための対象は「動く」のである。つまり、人物を求めて動くため、訪問先は必ずしも特定されていない。これは、名所巡りを想定しがちな「観光」に含まれるのか、疑似イベントの派生型なのか。韓流ツアーから旅の類型をふと考えてしまった。



ソウル市内にある、ドラマロケ地の学校前では仮設店舗がグッズを販売している

「冬ソナ」という幻想。韓国春川の韓・日・中、三カ国語表記の看板



만남의 광장

出会うの広場 相約之所

「冬のソナタ」撮影地 「冬季恋歌」撮影地

春川市 www.chuncheon.go.kr



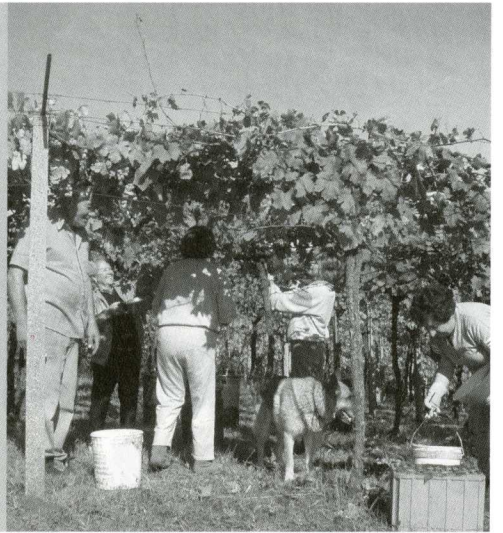
ソウル市内にある、ドラマロケ地の学校前では仮設店舗がグッズを販売している

「冬ソナ」という幻想。韓国春川の韓・日・中、三カ国語表記の看板



2005年春にJRで売り出され、人気を博した冬のソナタ弁当

特集 ツーリズム



もう一つの観光？ —イタリアの アグリツーリズム—

宇田川 妙子
(うだがわ たえこ)

本館先端人類科学研究部

ブドウの収穫の
農業体験ができる(ローマ近郊)

イタリアといえば、政府観光局も自負するように「文化と歴史の国」として世界各地から多くの観光客を集める観光国だが、そんななか近年注目されつつあるのが、アグリツーリズムである。
アグリツーリズムとは、農業(アグリコルトウーラ)

と観光(ツーリズム)が合体したことばで、その名の通り、農家がおこなう観光サービスのことである。たいしては使わなくなった土地や畜舎小屋などを利用して宿泊施設を作り、自分の農園で作った野菜やワイン、乳製品などを用いた食事を提供している。さらには農業体験、料理教室、乗馬やトレッキングなどのスポーツや娯楽を企画するところもある。

このため、ゆったりとした時間と自然のなかで、農家の人々と直接ふれ合いながら地元の料理や生活を楽しむという趣向が話題を呼び、最近では口ハスやスローフードなどのブームに乗って客が増え、日本からも観光客が訪れるようになった。
とはいえ実態は、こうしたイメージとずれることも少なくない。というのも、アグリツーリズムとは、法的にはあくまでも農家の副業として規定されたものだからである。観光サービスからえる収入が農業の収入を超えないという条件もある。

そもそもアグリツーリズムは、一九八〇年代半ば、衰退が進む農業への支援策として始まった。そして、農業の維持は農地の劣化を防ぎ、環境保護や地域の活性化にもつながると考えられ、奨励はさらに進んだ。もちろんアグリツーリズム農家のなかには、もともと環境問題や有機栽培などに関心をもっていたり、町おこしの中心人物として活動してきた者もいる。しかしその一方で、ビジネスチャンスのひとつとしてとびついたものの、うまくいかず撤退する農家も多い。

観光をとおして農業の維持・発展、環境保護、地域活性化という一石二鳥を狙おうとするアグリツーリズムに、総合的な評価を下すのはまだ早い。ただしこの観光形態が、たんなる消費主義的なムードの田舎生活の提供ではなく、地域に根ざし、むしろ生産者側が主体となった試みであるということは、そこを訪れる我々も彼らの生活を知りたいならなおさらもっと評価すべきだろう。

マサイ村の エンターテインメント

岩井 雪乃
(いわい ゆきの)

早稲田大学平山郁夫記念
ボランティアセンター客員講師

赤い布をまとった長身の戦士が、槍を片手に空高くジャンプする。そんなマサイの姿は、数あるアフリカの民族のなかでもっとも有名だろう。マサイの人びとは、このイメージを観光資源として有効に活用して「観光マサイ村」を作っている。ここでは、実際に生活している集落を観光客に開放しているのだ。お金を払ってなかに入ると、牛糞で塗り固めた家のなかを見学したり、戦士や少女の歌や踊りに参加することができる。最近ではホームステイプログラムを実施しているところもある。

とはいえ、決して観光客に媚びないのがマサイらしいところだ。わたしがタンザニアのンゴロンゴロ自然保護区のマサイ村を訪れたときのこと、観光客のためのダンスのほが、戦士同士の真剣勝負になってしまったことがある。マサイの戦士にとって、より高く跳べることは強さの象徴だ。大地のエネルギーがはじけ出るように、次々と宙に舞う彼らのダンスは圧巻だった。しかし、跳んでいるうちに彼らは本気になってきて、真

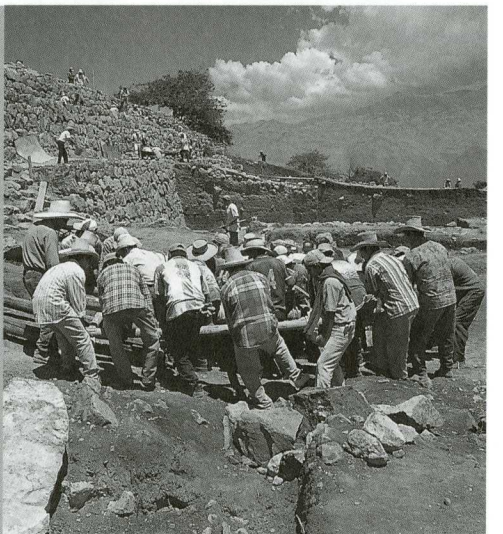
剣なジャンプ競争が始まってしまった。やがてわたしたちの存在は忘れられてしまい、ジャンプに陶酔する戦士たちを後に、わたしたちはすこすこと退散するしかなかった。

伝統生活を観光に提供しているマサイだが、近代的な生活と隔絶して生きているわけではない。マサイ村から少し離れた観光客の行かない集落では、ピリヤードに興じるマサイたちの姿がある。二年ほど前に入ってきたこのゲームは、すぐに大流行した。携帯の普及も目ざましい。サバンナでも電波が入る地域が年々拡大しており、牛を放牧しながらの通話が可能になりつつある。

急増しているタンザニアの観光客と発達する情報網を背景に、彼らの観光へのかかわりは変わっていくのだろう。エンターテインメントとして、洗練される方向か、うののだろうか。しかし一方で、あの内輪で楽しむ気持ちを失わないでほしいものだ。



観光客の男性には棒、女性にはビーズ飾りで歓迎



住民参加型の ペルー遺跡観光

関 雄二
(せき ゆうじ)

本館研究戦略センター

ユネスコの日本信託基金による
クントゥル・ワシ遺跡保存プロジェクト

ラテンアメリカ各国では、近年、住民参加型の持続的観光をとおして貧困解消を図ろうという動きが出てきている。古代アンデス文明の中核地であるペルーでも、遺跡などを核に、これを推進しようとしている。その先鞭をつけたのは、我々日本調査団である。

わたしが所属する調査団は、日本各地の大学や研究所の文化人類学者が寄り集まって、毎年、ペルーで発掘調査を実施している。ここ数十年携わってきた、北高地のクントゥル・ワシという大規模な神殿の調査では、偶然にも、大量の金製品を副葬した墓に遭遇し、出土品の帰属をめぐる騒動に巻き込まれた。国が、県が、はたまた地元の村に置くべきか、さまざまな議論が渦巻くなかで、我々と村人が選択したのは、博物館を遺跡の麓に建設し、そこに出土品を納めることであった。資金は、日本で開催した展覧会で集めた協賛金や寄付金を充て、完成後の運営は、地元の村に作られたNPO組織に委ねたのである。

遺跡周辺で暮らす住民が盗掘に手を染めることの多いアンデスで、住民自らが遺跡を守り、出土品を管理することは、稀なケースである。彼らの努力は、その後、上下水道や電気などのインフラ整備に結び付き、国連開発計画からも注目されることになる。また、この活動を聞きつけた各地の自治体からの講演要請は村人の自尊心を高め、これが遺跡保存への意識へとフィードバックされた。一方で、我々もユネスコや日本から援助を導き、遺跡保存や博物館改修を実現し、観光資源として整備することに努めてきた。

遺跡を掘れば、必ず何かが出てくるし、また出てきたものは、場合によっては、研究者の手を離れて、観光など別の脈絡の中で意味付けがなされる。情報のグローバル化と途上国に強要される新自由主義経済の波のなかで、出土品の利用や活用は、もはや文化遺産関係者だけに限定されるものではなく、なっているのである。観光開発にまで巻き込まれる文化遺産関係者という姿は常態化しつつあるといえよう。

特集 ツーリズム

戦争を語る、オンラインワンの博物館を

戦艦「大和」の復元物を媒介に、
歴史の証人ともよばれるべき
戦争体験者の証言が、今、
呉市海事歴史科学館に集まりつつあるという。
同館の戦争の悲惨さ、平和の尊さを
伝えてゆこうとする活動を紹介したい。

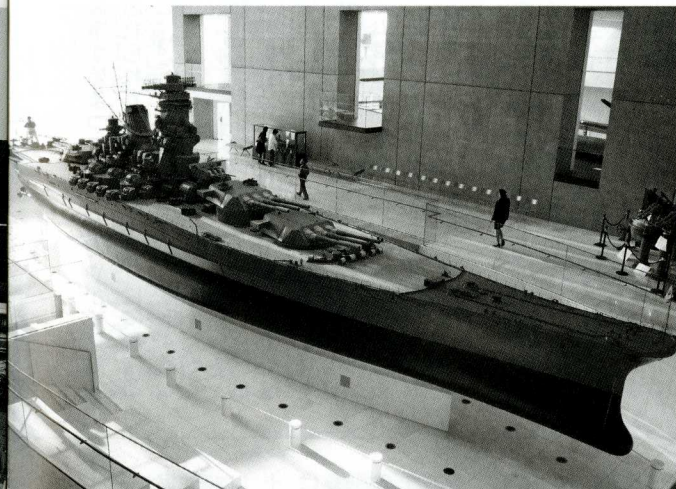
齋藤 義朗 (さいとう よしろう)
呉市海事歴史科学館(大和ミュージアム)学芸員

二〇〇五年四月三日、広島県呉市に新しい博物館が誕生した。その名は呉市海事歴史科学館。愛称「大和ミュージアム」といえばわかっていただけだろうか。日本海海戦から一〇〇年、太平洋戦争終戦から六〇年目、映画でもとりあげられ、戦争の時代を再検証する動きが活発化するなかでオープンし、初年度は一六一万人の来館者を記録した。二年目となる二〇〇六年二月末には累計二六〇万人を達成した。

八年の歳月を要した。紆余曲折を経て二〇〇三年に呉市で一〇分の「大和」建造が決定。初めてつくしの巨大プロジェクトは困難続きであった。ミュージアムの開館期日は決定済み。残された製作期間はわずかに二年(実質一年半)。資料分析やコスト面とともに、時間という大きな壁が立ちはたかる建造となつたのである。

戦艦「大和」は、昭和一〇年代の日本の技術レベルの高さを示すと同時に、時代の矛盾と戦争のむなしさを映す鏡でもある。真珠湾攻撃から八日後の一九四一年一月二六日、世界最大・最強の戦艦として登場しながらも航空戦力が主役となつた太平洋戦争を象徴するように、新造時の優雅な佇まいは増設された対空機銃でハリネズミのように変貌し、一九四五年四月七日、沖縄海上特攻の途上、米軍機の猛攻により三〇五六名の人命とともに悲劇的な最期を遂げた。今も三〇〇名近くの乗組員が氏名不詳のままとなっている。

「大和」に関しては情報が極めて嚴重に統制され、国民の目から隠されたまま建造され、沈没した。国民の大多数が存在を知つたのは戦後になつてから。終戦と同時にほとんどの記録類が灰となつた幻の戦艦である。その「大和」を一〇分の一スケールで実際に立体化するためには、全長二六三メートルの巨艦を一センチメートル単位で分析する必要があつた。模型の世界では、一ミリメートル単位の精度が要求されるからである。従来の研究蓄積に加え、あらたに収集した「大和」の原図面約二〇〇枚(部分図ばかり)と写真約一〇〇点、海底の「大和」を撮影した六〇時間におよぶ潜水調査映像などをもとにした戦艦「大



呉湾側から見た「大和ミュージアム」の外観

甲板材の木目にまでこだわった
1/10「大和」



船体部分建造中の1/10「大和」。これだけで20トンを超す

元「大和」2番主砲砲員 戸田文男さんが描いたスケッチ



瀬戸内海沿岸に延びるJR呉線の呉駅から専用歩道で徒歩五分、ミュージアムは戦艦「大和」建造の舞台となつた呉海軍工廠造船ドック跡を見渡す位置に建っている。

館のコンセプトは、明治以来、海軍工廠とともに歩んできた軍港・呉の歴史と、そこで培われた造船ほか各種技術を紹介し、「大和」の最期などを通じて戦争の悲惨さ、平和の尊さを伝えようというもの。その展示の中核に位置するのが一階展示フロア中央にそびえる一〇分の一スケールの戦艦「大和」である。

一〇分の「大和」を造る

模型といいながら、その圧倒的な迫力に訪れた人はみな息をのみ、一瞬足を止めたのちに周囲を歩き始める。全長二六・三メートルの超巨大模型は、図体が大きいだけでなく、可能な限り細部にわたって「復元」したものである。製作した側としては、単なる大型プラモデルの展示と思つてはだきたくはない。

ミュージアム建設にあつたのは、「どこにもない、呉でしかできないオンラインワンの博物館」を作るため、呉の造船技術の歴史を展示するシンボルが必要だつた。そこで出たのが一〇分の「大和」建造計画。潜水調査などを経て図面の製作に六年。一九九七年の立案から完成までには和「復元は、気の遠くなるような作業となつた。それでも不明箇所は数限りなかつた。そこは当事者への聞きとり調査で補うことになつた。例えば「大和」の代名詞ともいえる四六センチ三連装主砲塔は、概略図がある程度で、出入口のある背面部の考証は憶測の域を出ないものだつた。そこで元「大和」二番主砲砲員だつた戸田文男さん(当時、上等水兵)にうかがつたところ、「大和」が沈没直前、左に大きく傾斜した際に、扉を開けられず砲塔内に取り残された者がいたという辛い体験を語つていただいた。この証言から背面出入口のとり付け状態などが明らかになつたのである。

実際の製作段階でも、あらたな資料が発見されるたびに、作つては直しを繰り返し、試行錯誤の連続であつた。結局最後は損得勘定を度外視した「現代の匠」たちが熱意と気迫で納期に間に合わせたのである。一〇分の「大和」が形になつてくるにしたがい、製作担当者一同は、「大和」が鋼鉄の箱ではなく、三〇〇〇人が生活を営み、生命を託した、生きた建造物であつたことを実感するようになっていった。そして二〇〇五年二月一日、一〇分の「大和」は完成した。戦艦「大和」にかかわつた人たちが無数にいたように、一〇分の一スケールで復元した「大和」もまた元乗組員や遺族の方々、建造スタッフほか多くの関係者の想いが込められた艦となつたのである。

集まる記憶、よみがえる記憶

困難極まる道のりのなかで建造した一〇分の「大和」は、ミュージアムの来館者に科学技術

の発展と戦争の悲劇という「科学技術の光と影」両面のメッセージを送っている。ところが開館後同時に一〇分の「大和」があらたな資料や情報をもつ歴史の証人もいうべき人たちとミュージアムをつなぐ役割も果たしていることを筆者は実感するようになった。ミュージアムの開館と一〇分の「大和」の展示を契機にあらたに連絡をとることができた元乗組員や遺族の方々ほか関係者はのべ三〇人以上にのぼる。学芸員がいる研究室へ直接連絡をいただくこともあるが、ほとんどの場合、最初に接するのは展示室内各所で解説・案内をもらっているボランティアガイドさんたちだ。彼らを経由して学芸員へ情報が集められるのである。

元乗組員の方の場合、最初から「大和」乗艦者であったことを口にする人はまだ。大半がガイドさんとのやりとりのなかで明らかになる。多くがシルバー世代で構成されるガイドさんたちは、戦争の時代を生き抜いた世代とも年齢的に近く、孫のような学芸員と比べて身構える必要もない。加えてガイドさんたちは話術も巧みで古い話には事欠かない。そうするうちに「じつは自分は『大和』のあの部分におったんですよ」と一〇分の「大和」のある部分を示されるのである。

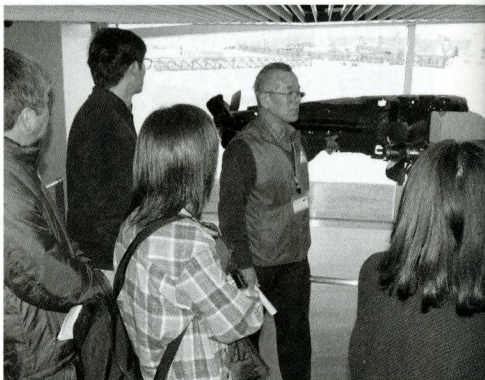
このような話は「大和」に限らず、大型資料展示室内にある「零式艦上戦闘機(零戦)」などでも同じである。戦争中、海軍の基地や航空母艦などでパイロット、あるいは航空機整備員をしていた方々の情報をえたのもガイドさん経由だった。そこから連絡をいただいて学芸員が展示室へ駆けつける。ミュージアムへ訪れる歴史の証人の引き出す能力が不足していると感じた場合には、館長の戸高一成や統括学芸員の相原謙次をインタビュアーとして巻き込んでの作業となる。企画展で募集、依頼した証言も含めると、こうして撮りためた六〇分ビデオテープは四〇本近くになった。これらは多くの方に見ていただけるよう準備を進めている。

「大和ミュージアム」では、科学技術と歴史の双方を展示することで歴史科学館の名称をとっている。その技術はよく「両刃の剣」と表現される。暮らしを豊かにできるはずのすばらしい技



1階「呉の歴史」展示室。
ここで証言者映像を聞くことができる

零戦62型や人間魚雷「回天10型」を
展示している大型資料展示室



活躍するボランティアガイドさん。
筆者よりも解説がうまい

発掘においても、ボランティアガイドさんは多大な貢献をしているのだ。
ミュージアムでは、週末ともなるとおじいちゃん・おばあちゃんから子・孫までの三世代にわたる家族連れが増える。そして歴史展示室内では高齢者が先生となつて、戦争中の話を、関連する展示資料をもとに家族に説明している場面に遭遇することが多い。ガイドさんやほかの来館者も含めて、若い世代が生徒になつて説明を聞く即席ミニ講座が開かれていることもしばしばである。後でうかがうと、家庭では戦争中の話をしたことはなかったが、ミュージアムの展示を見て話す気になったという方ばかりだった。

「記憶」を「記録」に

終戦から六一年。二七六人いた沖縄海上特攻時の「大和」乗組員生還者も二〇人を割り込んだ。戦争の時代を経験した世代は高齢となり、ここ数年で加速度的に減り続けている。来館者に「生の証言」を聞いていただくころにも、体力的に不安を抱える方がほとんどだ。しかし当事者の話ほど説得力のあるものはない。そこでミュージアムの歴史展示室やライブラリー内には証言者映像コーナーを設け、一九人の方々の話を聞いていただけるようにしている。また、ミュージアム開館後に出会うことができた歴史の証人たちには、後日、ビデオカメラの前でお話をいただくようお願いしている。住所が遠方で、ミュージアムへご足労願うのが難しい場合、カメラと三脚を抱えてこちらから訪問している。お話をうかがうにあたり、筆者に歴史の証人の記憶を

術であつても、人間の使い方次第で悲惨な結果を生む危険性をあわせもつ。一〇分の「大和」はその象徴であり、戦争の悲惨さ、平和の尊さを我々に語りかける。それゆえミュージアムでは、戦争の時代の「記録」と「記憶」を証言者映像として多くの人たちのために残し、伝えていこうとしている。これは当館に課せられた義務だと筆者は思っている。

ペー(白)族の民族衣装

女性用(白族)(頭飾り、ベスト、上衣、前掛け、ズボン 標本番号H226747~226751)
 男性用(白族)(頭飾り、ベスト、上衣、ズボン 標本番号H226739~226742)中国

横山 廣子 (よこやま ひろこ)

本館民族社会研究部

中国雲南省大理市では一九八〇年代前半以降、観光化が進んだ。服飾はこの地域にあつても時代を反映して変化を遂げるが、近年、当地のペー族の青年男女の民族衣装としてこのような衣服が登場した背景には、観光化が大きな要因のひとつとしてある。

以前とは素材がまず違う。かつての生地は木綿が多く、刺繍には絹が用いられたが、現在は化学繊維全盛で、できあいの刺繍テープもよく使われる。扱いやすく、舞台衣装のような鮮やかさのある素材が選ばれる。

それまで女性の大半が民族衣装を毎日着ていた村でも、若い娘が次第に着なくなつたのと歩調を合わせて、このような民族衣装が出現した。観光客の接待や歌や踊りを披露する時、あるいは祝祭時の晴れ着として、娘たちがこれを着る。既婚女性でも、この未婚用の衣装を着てみやげものを買っていたりする

ることがある。若い男性用は踊りを踊る時以外、ほとんど着用されない。

形態も変化を遂げた。頭飾りは男女とも着脱が簡単な帽子式になつている。以前は男性は布をターバン状に巻き、女性は布を何枚も重ね、その上に三つ編みにした髪に赤い毛糸を結んだのをぐるぐると頭に回して留めていた。今や三つ編み部分も黒い毛糸でつくりつけるので、短髪でも、これをかぶればペー族の娘らしく見える。

上衣、ズボン、ベスト、前掛けからなる女性用の服は、ベストの左肩の飾りボタンがただの飾りになり、前身ごろは開かない。代わりに後ろと脇のフアスナーで脱ぎ着する。前掛けは後ろの鍵ホックで留

め、その上に蝶形のリボンと二枚の垂れが下がり、ひもで結んでいるように見せている。これだと短時間で誰が着てもさまになる。

このような衣装は観光みやげとしても売られてきた。最近では現地観光ガイドの女性が、ペー族ではなくても、これを着て団体旅行客を案内するようになった。



ことは人事より始まる

大森 康宏
(おおもり やすひろ)

本館民族文化研究部

フランス、パリ第5大学修士課程修了、パリ第10大学にて民族学博士号取得。1976年に民博に着任。総合研究大学院大学文化科学研究科併任教授。専門は映像人類学(民族誌映画)。ヨーロッパの移動民マヌーシュの生活やその信仰、また聖地や巡礼に焦点を当てた映像記録を含め作品数は長編50本余り。著書に『映像人類学の冒険』(せりか書房)、『進化する映像』CD-ROM付(千里文化財団)など。撮影・制作監督を務めた「津軽のカミサマ」が1995年フランス、パリ第14回民族誌映画大会ナヌーク賞(グランプリ)受賞。3月15日から特別展「聖地・巡礼—自分探しの旅へ—」公開。

ジャン・ルーシュ(1917~2004年)との最後の1枚
パリのカフェにて(2003年、秋)



さよなら民博

山本 紀夫
(やまもと のりお)

本館民族文化研究部

京都大学大学院農学研究科博士課程修了。1976年に民博に着任。助手、助教授を経て教授。総合研究大学院大学文化科学研究科併任教授。アンデスやヒマラヤ、チベットなどの山岳地域で主として先住民による環境利用の方法の調査、研究に従事。著書に『インカの未裔たち』(日本放送出版協会)、『ジャガイモとインカ帝国』(東京大学出版会)、『ラテンアメリカ楽器紀行』(山川出版社)、『雲の上で暮らす—アンデス・ヒマラヤ高地民族の世界』(ナカニシヤ出版)など。

民博研究部の野球チーム(1976年)。
筆者(左から2人目)を最後として、みんな民博を去った



自作の百葉箱とともに。ペルー、クスコ県
マルカバタ村にて(1984年)



「大阪の万博跡地に博物館ができるらしい」という噂を聞いたのは、たしか一九七四年のことであった。アマゾン川源流域を歩き回っていたとき、そのニュースがどこから入ってきたのだった。しかし、そのときはまさか自分がその博物館に勤務することになるうとは思ってもみなかった。

その二年後、経緯は省略するが、わたしは民博の館員になった。当時の民族学はまさに上げ潮といった感じで、民博も熱気にあふれていた。梅棹忠夫館長も館員にさかんに激を飛ばしていた。いわく、早く学位をとれ、一年間に一〇〇枚の原稿(四〇〇字詰で!)を書け、などなど。しかし、館員はみんな若く、元氣にあふれていたせいか、激しい激も苦にならず、それを励みに開館に向けて全力を投入していた。わたしも無茶苦茶な忙しさのなかで、自分の力を試しているような気分を味わっていた。それというのも、わたしはもと

もと京大の大学院で植物学を専攻する大学院生であったが、博士論文に向けての実験の途中で民博に就職したため、二重生活を余儀なくされたからである。すなわち、日中は民博で開館に向けての展示作業や図録作りをしながら、夕方の五時以降は京大に行つて夜遅くまで植物の観察を続けていたのである。

そんな生活は結局、民博が開館してから一年後の九月まで続いた。そして、学位論文を提出したあと、すぐにわたしはペルー・アンデスに向かった。学生時代からの夢であった「インカの未裔(まきえい)たちと暮らしをともにし、彼らの社会や文化を明らかにするためである。じつは、この夢を実現したかったからこそわたしは植物学から民族学に転向したのである。

当時、民博では他分野から民族学に転向したスタッフはめずらしくなかった。そもそも館長自身も動物学から民族学に転じた研究者であった。これは、当時の民族学が他分野の研究者をも引き込むだけの大きな魅力をそなえていたことを物語るであろう。それから三〇年が経ち、民族学も民博も大きく変わった。とりわけ、民博は同じ研究組織と思えないほどに変わった。そんな民博の今後をこれからは遠くから見守ることにしよう。では、さよなら民博。

民博に在籍することになったきっかけ、そして今日のわたしがあるのは、フランスの民族学者で映画制作者のジャン・ルーシュとの出会いがあったからである。

一九七〇年にフランスのトゥール大学大学院に入学し、一年ほどして民族学研究の必要性から動く映像による調査ノートとして映像作品に関心をもつようになった。毎日のように移動生活を続けるマヌーシュたちの姿をノートに書くだけでは、出来事を思い起こすことは可能であっても、詳細な事実はボンヤリとしたものであった。それをひとつひとつ映像のコマに記録し、再生できるもの、それは映画しかなかった。当時トゥール大学に芸術社会学の教授として活躍していたジャン・ドヴィニエーの生徒となったわたしは早速映画と社会科学についてたずねてみると、即座にジャン・ルーシュなる研究者の存在を教えてください。しかし彼にコンタクトし、門下生となる方法は教えてくれなかった。

一九七二年春になって、パリへ出るたびにジャン・ルーシュに面会しようとする人類博物館の事務所、国際民族誌映画委員会を訪ねた。しかし留守がちなうえに編集作業に入るとまったく人と会わないと聞かされた。数回廊下で会えたのだがいつも「次回に」と言われ、話ができなかった。翌年の一九七三年、第九回国際人類学・民族学シカゴ会議の「Urgent Anthropology」のもとで、民族誌映画が重要視され、日本の「映像記録センター」の活動が注目されると、

ルーシュからわたしに接触してきた。当時ルーシュはアフリカの人びととしか接しないとうわさされていた。この後にルーシュとしては初めてわたしという東洋人の生徒を指導する教官となった。ルーシュからマルセル・モースの生徒で多彩な才能を発揮した岡本太郎を紹介され、彼から古きものなかにこそ新しい芸術表現が見えてくることを教えられた。さらに、シネマテークフランセーズのアリ・ラングロワの生徒となつて、シネマの歴史と人間の関係から人間の感性の深さを教えられた。当時、博物館のモノの展示と映像展示の組み合わせをどうするかは二〇世紀後半の問題としてクローズアップされてきた。

こうしたなかで、岡本太郎の「太陽の塔」のある万博公園内に、民博が開館することとなり、一九七五年、初代館長であった梅棹忠夫先生が民族学研究を求めているか映像制作をしている研究者を求めてわたしにコンタクトしてこられた。結果的に開館の前年、一九七六年秋から赴任することになった。ジャン・ルーシュは生涯にわたつて自分の直弟子とよべる人間を個人的に育てなかった。自分の撮影地や編集室にも他人を入れたがらなかった。しかしわたしはアフリカの撮影地を除いて、パリ市内の撮影や編集にはしばしば立ち会つたことを許可された。東洋人として初めてルーシュの助手つとめをすることができたのは、一生の糧となった。

流行と関係なく学ぶ日本

カタリナさん(仮名)は東京のある大学で学ぶドイツ人留学生である。日本の大学院で修士号を取得することを目指し、現在、猛勉強中である。日本に来る前からドイツで日本語や日本文化を学んでいた。ドイツでは「日本学」(Japanology)を専攻していた。だが彼女が日本学を学ぶようになってきたきっかけは少々変わっている。

彼女はドイツで大学に進学する以前、昼間は保育園で働きながら、夜間高校に通っていた。高校を卒業し、大学に進学しようと考えたときに、インターネットでいろいろな大学の授業内容を調べたそうである。そしてなぜか、日本学を専攻することに決め、ハイデルベルク大学に進学した。日本学を専攻しようと思った理由は「日本について何も知らなかったけれど、面白そうだと思ったから」。

ドイツでも日本学や日本語を勉強する学生は少なくない。ハイデルベルク大学にも何人かの学生が進学してきた。そんな学生の多くは、大学進学以前から日本文化に興味をもち、日本学を専攻する。なかでも日本のアニメやマンガはドイツでも人気がある。そうしたアニメ好きやマンガ好きの若者が日本学の専攻を希望するのである。またドイツの大学では、学生は主専攻と副専攻を決め、専門分野をふたつ勉強することが求められる。そのため経済学を主専攻とする学生のなかにも、日本や東アジアの経済発展を勉強するために、副専

日本のいろいろな学び方

市川 哲 (いちかわてつ)

本館機関研究員

外国人として生きる



クリスマス時期に街を散策するカタリナさん

留学生の友人と茶道を体験

書店で日本の小説を探す

攻を日本学にする者が多い。だが彼女は日本のアニメもマンガについても全然知らず、日本経済にも特別な興味をもっていない。サブ・カルチャーと経済発展は海外における現代日本のイメージを代表するものであるが、彼女はそうした「流行の」日本イメージに流されずに日本研究を志したのである。

関西弁についての論文執筆

カタリナさんは大学では日本語、日本文学、日本の歴史等を学んだ。勉強は楽しかったが、特に日本学に一生打ち込もうとしていたわけではない。それでも、大学三年生になると、彼女に日本に留学するチャンスが訪れた。ドイツではハイデルベルク大学以外に、チュービンゲン大学にも日本学の専攻がある。このチュービンゲン大学は毎年、自校の学生を日本に留学させるが、このとき、たまたま定員が満たされなかったため、ハイデルベルク大学の学生の彼女がその留学生枠に入ることが可能になったのである。

彼女はチュービンゲン大学の学生たちとともに、京都のある大学でも日本語を勉強することになった。彼女が日本に来たのはこれが初めてであった。しかもドイツでは日本食を食べたことすらなかった。じつは彼女が初めて食べた日本料理は、日本に来る際に買った飛行機の機内食で出されたソバだった。

京都で彼女はいろいろな日本の文化に

調べ、京都弁や大阪弁の違いの比較研究をおこない、論文としてまとめた。

再び、日本へ留学

これを機にチュービンゲン大学の修士課程に進学し、さらに日本の大学で国費留学生として勉強することになった。彼女が現在留学している日本の大学では、留学生は世界各地からきており、中国、インドネシア、フィリピン、韓国、フランスなど、さまざまな国の学生とともに勉強している。ドイツで日本学を勉強していたときには、そのように世界各地の学生と一緒に勉強することはなかった。だが彼女にとっては、世界各地の学生とともに日本語を勉強する状態は別に特別なものではないようだ。むしろ、それぞれ出身国は異なるが、日本語や日本文化を勉強したいという目的は皆同じであり、自分の出身国が懐かしいといったことや、日本語を学ぶうえで難しさ、外国人として日本で暮らすうえでの困難など、日本人に相談してもなかなか理解してもらえない問題を共有している。例えば、日本の大学の授業は、当たり前ではあるが、日本人学生のためのものである。だが外国人留学生は、日本語に不慣れで日本文化の背景を知らないために、完全に授業を理解できないこともある。こんな時、他の留学生と話し合うことで、皆同じような問題があるわけではないことを確認すること

接することができた。そのなかのひとつは、以前から興味をもっていた弓道である。弓道を習うのは楽しかったが、困難なこともあった。弓道の技術や弓道用語などが、難しい。だが、特に大変だったのは、弓道の練習中に先生が話す関西弁がなかなか理解できなかったことである。先生が話すことは、弓道教室の先輩が「普通の」日本語に訳してくれた。彼女がハイデルベルク大学で習った日本語は、いわゆる標準語であった。だが京都での暮らしは、同時に関西弁の世界で暮らすことを意味していたのである。

こうして彼女は少しずつ関西弁を覚えていった。例えば、「高うなる」という関西弁を初めて聞いたときには、「たこ」という名詞と「なる」という動詞のふたつからできた表現だと思い、「たこ」という語を辞書で引いて調べてみたが、それらしい項目は載っていなかった。それで知り合いの先生に聞いて、初めてこれは関西特有の表現だということがわかった。

京都に五カ月住んだ後、彼女はドイツに帰国し、日本学を勉強し続けることを決意した。大学もハイデルベルクからチュービンゲンに変更した。帰国後、彼女はチュービンゲン大学の日本学の授業で、京都で見た関西弁について発表する機会をえた。発表は好評で、指導教授は京都に留学する他の学生のために、彼女に何度も同じ発表をすることを求めた。さらに関西弁について卒業論文を書くことをアドバイスした。こうして日本の方言についていろいろと

ができる。このような問題は、なかなか日本人には理解してもらえないようである。

彼女は現在、日本とドイツの戦前の教育を比較研究している。日本の大学で教育学のゼミに所属し、勉強しながら気づいたことがいくつもある。そのうちのひとつは、日本の大学では学生の研究テーマが必ずしも所属する専攻と一致するわけではなく、むしろそれが普通だということである。彼女のように日本とドイツの教育史の比較研究、というオーソドックスなテーマだけではなく、教育以外の日本の社会問題や流行文化等をテーマとしてとり上げる学生もいる。このような研究テーマの多様性は、ドイツと日本の大学の違いのひとつであると彼女はいう。また、日本とドイツの第二次世界大戦に対する認識の違いにも驚かされている。ドイツでは第二次世界大戦に対する学生の意識は現在でも高いが、日本の学生は第二次世界大戦のことについてあまり知らず、問題意識も高くない。

カタリナさんに限らず、日本で暮らし学ぶ外国人は、皆それぞれ異なった背景と、共通した問題を抱えている。日本に留学し生活する外国人は、今後も増え続けるだろう。そして留学生たちはそれぞれ立場や興味にしたがって、さまざまな方法で日本語や日本文化を学んでゆくことになるだろう。日本をどのように学ぶのか、そして日本でどのように暮らすのか、その方法もこれからどんどん多様化してゆくのだろう。



(写真2) マンダイリンのゴルダン・サンピランに用いられるゴングとシンバル、サルネ



(写真1) マンダイリンのゴルダン・サンピランの演奏



(写真3) カ口のグンダン(母と子)とサルネ



(写真4) ゴンダン・サバングナンの演奏。手前の奏者は左手でピン(ハセック・ハセック)を打っている



(写真5) パルマリンの儀礼におけるトルトルとよばれる踊り

守ることを信条とするパルマリンとよばれる組織がある。彼らは、ムラ・ジャティ・ナ・ポロンをはじめとするバタックの神々に対して祈りをささげる。その祈りには音楽が欠かせない。というよりは、音楽自体も神にささげる祈りとみなされている。そのときに用いられる合奏がゴンダン・サバングナンである。タガニンとよばれる五つのタイコとオダックとよばれるタイコのセット、ゴルダンとよばれる少し大きめのタイコ、大型のサルネであるサルネ・ポロン、オグンとよばれる四つのゴング、そしてハセック・ハセックとよばれるガラスのピンからなる(写真4)。

パルマリンの儀礼においては、このゴンダン・サバングナンに合わせて、手を自分の前であわせ、身体を上下させながら手を前後に軽くふるトルトルとよばれる一種の踊りをおこなう(写真5)。祈りをささげる相手により、それぞれ祈りのことばがあるように、演奏する曲も祈りをささげる対象によって決まっている。リーダーが、それぞれの神にささげる祈りのことばを唱えると、それに合わせて音楽家は適切な曲を選んで演奏をはじめ。すると人びとはこのトルトルを一緒におこなうのである。

タイコがきざむリズム、それに合わせて身体を動かす人びと。モノの収集と並行して、撮影したビデオによって、バタックの人びとの文化におけるタイコの存在感を、展示をとおして少しでも伝えるために、これからアイデアをしばっといきたいと考えている。

バタックのタイコ

福岡 正太

(ふくおか しょうた)

本館文化資源研究センター

スマトラ島

バラエティに富んだ楽器

タイコは、世界でもっとも広く見られる楽器のひとつである。しかし、その形や奏法、そしてそこから生み出されるリズムは非常に多様であり、世界の音楽の共通性と多様性を体現する楽器だと言ってもよいだろう。タイコは、数年後のリニューアルを目指すみんばくの音楽展示におけるテーマの候補のひとつともなっている。わたしは、リニューアルの準備のため、二〇〇五年七月、インドネシアのスマトラ島を訪れた。

北スマトラ州に住むバタック人は、トバ、カコ、パクパク、シマルングン、アンコラ、マンダイリンなど、いくつかの集団にわかれており、それぞれがタイコを中心とする合奏音楽をもっている。わたしは北スマトラ大学のリタオニ・フタジユルさんの協力をえて、これらさまざまな合奏音楽に使用される楽器を収集しながら映像取材もこなした。

バタックの人びとのタイコは、集団により大きいものから小さなものまでバラエティに富んでいる。もっとも大きなタイコを使うのは、マンダイリンの人びとだろう。ゴルダン・サンピランとよばれる彼らの合奏は、九つの円筒形の胴をもったタイコがメインになっている(写真1)。いちばん大きいものは、一・五メートルほどの長さがあり、小さいものでも一メートル以上になる。それにサルネとよばれるオーボエ系の楽器一、小型のゴングが三か四、中型ゴ

文化に根ざす存在感

これらのタイコ合奏は、バタック人の古くからの信仰にささえられている。たとえば、ゴルダン・サンピランは、結婚式や葬式でも演奏されるが、古くは、祖先の霊を呼び、霊媒を通じてそのことばを聞くために演奏されたという。今でも、演奏時に憑依がおこることはまれではないそうだ。そのため、ゴルダン・サンピランを演奏する場合には、必ずスイギユウを犠牲にして、霊に対してささげなければならない。

現在、バタック人の多くはキリスト教徒であり、少数派ではあるが、イスラム教徒もいる。そんななか、トバの古来からの信仰を

グが二、シンバル一で演奏される(写真2)。それに対して、もっとも小さなタイコを使うのはカコの人びとだろう。ゴンダン・リマ・サダラネン、あるいはゴンダン・サルネとよばれる合奏には、ゴンダンとよばれる四〇センチメートル程度の長さの細長いタイコ一対と、サルネ、小ゴング一、大ゴング一が用いられる。一対のゴンダンは、それぞれ母(インダウン)と子(アナック)とよばれ、子のゴンダンには、グラントウンとよばれるさらに小さいタイコが結び付けられている(写真3)。

ゴルダン・サンピランの音は、腹に響いてくるが、ゴンダン・リマ・サダラネンの音は、かわいらしいと形容したくなるような音だ。しかし、演奏が始まるとかなり激しいリズムを打ち出し、迫力があるのに驚く。

秋営地への移動の準備で、幼児用の鞍に子どもを縛って落ちないようにする



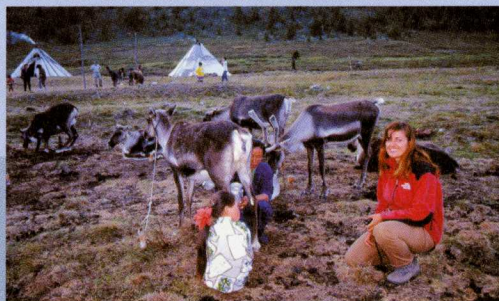
トナカイの乳房を拳で叩きながら搾乳する。乳量は約250グラムと少ないが、脂肪分が牛乳の5倍もある。チーズに加工したり、茶に入れて飲む



夏営地で、トナカイの群れを追う少女。トナカイは灌木(かんぼく)の若葉を食べる



夏、伸びてきたトナカイの袋角を切る。袋角は漢方薬になる。以前はネグデルに納めたが、今は仲買人が中国に売っている



今や、国際観光スポットとなったツァータン社会

トナカイ (学名: Rangifer tarandus)

スカンジナビア半島からシベリア、グリーンランド、北米のタイガ帯、ツンドラ帯、北極圏にかけて生息する。オス、メスともに角をもつ。角は春に生え始め、大きな枝分かれした袋角に生長する。袋角の表面には皮膚があり、そこから体温を放出する。大きな枝角は表面積を増やしており、夏に効率よく体温を放出する。秋から皮膚を落として骨角になり、冬に角が脱落する。また、寒さや雪に適応した厚い毛皮や横に広がる蹄(ひづめ)をもつ。夏は草や木の葉を食べ、冬は雪をかきわけてコケなどを食べる。



トナカイと生きる

稲村 哲也
(いなむら てつや)

愛知県立大学教授

トナカイ飼養発祥の地

モンゴル最北端フスグル県に「ツァータン」とよばれるトナカイ遊牧民がいる。遊牧生活続けるのは三〇家族ほどに過ぎない。しかし、そこはトナカイ遊牧の最南端、また山地タイガ帯の最南端、草原と接する地域であり、「トナカイ飼養が草原の牧畜に影響されて成立した」との説によれば、トナカイ飼養発祥の地である。またツァータンたちの生活は、タイガのトナカイ遊牧の形態をよく維持している。

筆者が最初にかの地を訪ねたのは一九九三年九月。モンゴル人地理学者とともに、ウランバートルからロシア製ジープを走らせ、北端のソム(郡)定住区まで四日かかった。国境警備隊の宿舎に泊めてもらい、翌朝、ウマを用意し国境警備隊の案内で出発した。森のなかを駆け、湿地を抜け、川を渡り、山道を上下し、休まず進んだが、途中で陽が落ちてしまった。進路をウマに委ねてなお進むと、イヌの吠え声が聞こえ、暗闇に天幕のシルエツトが浮かんだ。なかに招き入れられると、ツェウエルさんというおばあさんと娘さんがトナカイ乳入りのお茶を出してくれた。それが美味しくて何杯もお代わりした。トナカイの毛皮の上に疲れた身を横たえると、円錐形天幕の頂点の間から雪が降り込んでいた。翌朝、天幕の外に白銀の世界が広がっていた。雪原の起伏の向こうからトナカイたちがあらわれた。トナカイに騎乗した息子さんが巧みに群れを追ってくる。心のなかでおもわず「これだ」と叫んでいた。それから筆者は、ツェウエルさん一家を毎年のように訪問し、いつしか一〇回を数えた。

彼らは家族単位で天幕に住み、一年をとおして移動をする遊牧生活が続けてきた。夏は標高二三〇〇メートルほどの冷涼な高原(氷食谷)に比較的集まり、冬は標高一八〇〇メートルほどの森のなかに分散する。食糧確保のためクマ、シカの猟、また、現金をえるため毛皮獣のクロテン、リスの猟もしてきた。

悠久のときを過ごしてきたかに見えたツァータンたちは、じつは、激動の時代をからくも生きぬいてきたのだ。もともと、西に接するトゥバ共和国(現在ロシア連邦に属す)とモンゴルの国境地域で移動していた彼らは、一九四四年、トゥバがソ連に併合された後、夜陰に紛れて国境を越えてきた。コルホーズのための家畜共有化、対ドイツ戦のための家畜徴用、子どもたちの学校の寄宿舎での病氣蔓延などがその理由だった。

ようやく定着したモンゴルでも一九五〇年代末、コルホーズに倣ったネグデル(農牧組合)が実施され、トナカイが共有化され、それを請け負って飼うようになった。給料が支給され、小麦粉などの食糧が安定的に供給され、狩猟への依存度が減り、トナカイ飼養数が増加して一〇〇〇頭を超えた。一方、林業や漁業が開発され、定住区に住む人も増えた。

適応の道を模索

一九九〇年、モンゴルは民主主義市場経済に国家体制を転換した。トナカイが私有化されたが、給料はなくなり、医療、獣医、流通、情報などすべての生活支援システムが無くなった。生活に窮したツァータンのトナカイ個体数は数年で半数に減ってしまった。一方、森の民の小さな社会が突然、秘境中の秘境としての国際観光スポットになってしまった。幸い、観光は夏の短い期間に限られる。ツァータンのある者は観光客へのみやげ物を考案し、収入をえるようになった。また、ウシやヒツジを飼う草原の遊牧民と協力し合い、草原家畜を所有して乳製品や現金収入をえるなど、新たな適応の道を模索している。

ツェウエルおばあさんは数年前に亡くなったが、娘のハンダーさんが結婚して子どもができた。国際関係と国家体制の変革に翻弄(ほんろう)されながら、伝統を守ってきたツァータンたちは、これからも森を愛し、トナカイとともに生きる生活が続いてくれるだろう。



今日もスタコの車窓から

高野 さやか (たかの さやか)

東京大学大学院総合文化研究科

庶民の足

インドネシア・スマトラ島のメダン市には、たくさん「スタコ」が道路を走っている。

スタコとは、ここでは小型バスのことだ。正式なインドネシア語でないように、他の地域では通じない。何故そうよぶのか地元の人に聞いてみても、スタコの意味はよくわからない、というのが正直なところらしい。

ことはひとつの目標である。いつまでもスタコに乗っているのは、かつこ悪いことでもあり、不便でもある。

わたしも、ほかの交通手段を確保すべきだろうかと考えた。ぎゅつぎゅつに詰め込まれると、さすがに息苦しい。運転手付きの車は望むべくもないが、バイクタクシーを月極めで雇うという方法だつてある。だが、スタコにはスタコのよさがあるのだ。二年間で運賃は二・五倍になったが、タクシーなどよりはずっと安い。そのつと料金交渉が必要なバイクタクシーに比べて、明朗会計だ。道も覚えられる。明るいうちなら、女性・子どもが多いから安心感があるし、もし不安を感じたら、とり外されているドアからすぐに降りることができ。

印象的な出来事に遭遇することもある。赤ちゃんを抱いたお母さんが、料金を払わずに歩き去ってしまったとき、運転手はあきらめ顔で見送っていた。車が止まる前に、わたしがつい立ち上がって降りようとする、市場帰りのおばさんが「あんた座ってなさいよ」と笑いながら言う。「ここから何番のスタコに乗ればいい?」とたずねることが、会話の糸口になることも。空調の効いた車の窓ガラス越しに見るときは、街の風景も別の場所のように生き生きと感じられるのだ。

というわけでわたしは今日も、1000ルピア札を握りしめ、スタコに乗って出かけるのである。

道路に出れば、色、デザインさまざまスタコが目につく。外装は会社によって異なるが、運転席の内装や前後の窓は、運転手の好みで飾り付けてあり、日本の長距離トラックを思わせる。急発進・急停車は当たり前。しきりにクラクションを鳴らし、接触ギリギリのところをすり抜けていく。近年手ごろな価格の車が登場し、交通量が著しく増加しているメダン市で、乗用車やバイクのドライバーたちはスタコに気を使わないと運転できない。しょ

つちゅう起きる停電で信号が消えているときも、主導権を握るのはスタコたちだ。公共交通機関の整備が不十分なので、庶民の足として大活躍している。乗客は道端で待つていて、外装と番号で目当てのスタコを見つけ、合図して止める。停留所や時刻表はない。後部座席は向かい合ったベンチ状で、ひざを突き合わせて座る。かなり揺れるので、読書や居眠りをしてる人はまず見かけない。降りたいところで運転手に声をかけて知らせ、前にまわって料金を手渡す。市内なら、一人二五〇ルピア(約三五円)だ。

今日は何人乗せたかな?

スタコの運転手にとって最大の関心事は、いかに満員に近い状態で走るか、である。通りの反対側からでも、合図に気が付くと、ずっと待つている。乗っている車がいきなり止まるので、降りる人もいないのに、と不思議に思っている、遠くからゆつくり歩いてくるお客さんがいることに気が付く。市場など人の集まるところでは、しばらく客待ち停車をする。どつ見ても満員でも、いいから乗れ乗れ、と誘うので、乗車拒否するのは乗客の方だ。

助手席に乗り込むと、スタコに何が必要で、何が必要でないか、はつきりと見ることができ。運転席は改造が繰り返され、設備は最小限。速度計などの計器はどれも動いていない。内装は金属板が

むきだしになっている。助手席の窓は、運賃の受け渡しのため常に開けておくので、ドアも外側からだけ開けはよい。いいかげんなようだが、細かいところには独自の工夫がある。微妙なハンドルさばきがとても大事なので、ハンドルはひとまわり小さなものに取り替えられている。ウインカーのレバーはクラクションにつながって、歩行者の注意を引く際などに反射的に使われる。乗客の足元にはスベアタイヤ。釣り銭はダツシユボードの上に並べ、赤信号のあいだに紙幣を整理してポケットにしまう。

乗客の数が、運転手の収入に直接結び付いている。会社には毎日決められた額を車の使用料として支払えばいいからだ。営業は運転手本位。乗客を乗せたまま、ガソリンスタンドにも行く。給油が終わるまで、みんな静かに待つている。慣れしてくると、停留所と運行時間に拘束されている日本のバスが、つれなく思えることさえある。

1000ルピア札を握りしめて

別れ際に「スタコで帰る」と言うと、「気を付けてね」と言われることがある。「スタコに乗ったことなんてないわ」と言う人も多い。用心のため、いつも乗る前には運賃をポケットに準備しておき、財布や携帯電話は出さないようにする。メダン市の若者にとつても、自分のバイクなり車なりを手に入れてスタコから卒業する



黄色のスタコ。ブレーキランプには破損防止のカバーがしてある

メダン市内の様子。ビルの屋上にはテレビ用のパラボラアンテナが並ぶ



別会社のスタコ。新しい車体のものが増えてきている



首都ジャカルタでは見かけない形のバイクタクシーも健在

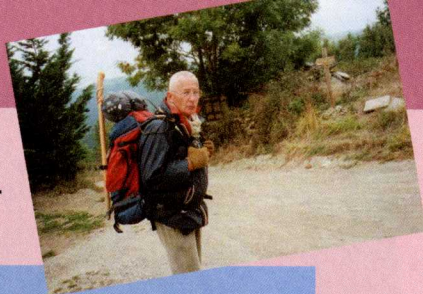
聖地・巡礼 — 自分探しの旅へ —

人びとは映像を通じて異文化に対する情報をえるようになりました。文化人類学者のカメラの眼は民族文化の様子を写し撮り、その記録は研究者にとって「聖なるもの」となりました。

今回の特別展では、民博で独自に撮影取材をおこなった映像と展示物によりスペインのサンチャゴ・デ・コンポステラ、四国巡礼、恐山、ルルドなどの「聖地・巡礼」、並びに世界各地で研究者の聖地ともいえるフィールドで撮影した記録映像を紹介しつづけます。映像と音声によって、聖地・巡礼を体験することができ、人類学者の辿ったフィールドをも視覚体験する絶好の機会です。

会 期：3月15日(木)～6月5日(火)

場 所：特別展示館



編集後記

昨年の秋、韓国の航空会社を使って欧州から帰国の際に、仁川(インチョン)国際空港から日本人女性ばかりのツアー団体と同じ飛行機に乗ることになった。皆、筒状に巻いたポスターを手荷物として大事そうに抱えている。「これ手垢付くのいややからまだなに見てへんけど、サインしてなかったらどーしよー。あたし、泣くわ。あはははは」と、関西弁で賑やかに会話をしている。ポスターはどれも、韓流スターのご尊影らしい。憧れのドラマの地に身をおき、幻想にどっぷりと浸かり、そしてその幻想のかけらを手に入れ満足そうに家路に着く女性たち。この体験は、しばらくは彼女らの元気の源となるのであろう。

博物館もまた人びとが記憶、幻想、疑似体験を求めてやってくる「観光」の場である。研究者が提示する「現実」は、ときには来館者の期待を裏切るということもありうる。だが、あなたの幻想は間違っていますよ、とただ否定しただけでは、来館者に不快感を与えるばかりだ。幻想の欲求を受け止めつつ、別の側面も教示する。そのバランスが大切なのだろう。観光業界で進む「幻想の復権」は、博物館のあり方をも変えてゆくかもしれない。(山中由里子)



交通案内

■大阪・千里万博記念公園内 ●大阪モノレールで「公園東口駅」・「万博記念公園駅」下車徒歩約15分。 ●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車徒歩約15分(茨木方面から1時間1本程度、日本庭園前駐車場乗り入れのバスがあります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください)。 ●自家用車の場合は、万博記念公園「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。 ●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。



次号予告 / 4月号特集
森

2007年3月号

第31巻第3号通巻第354号
2007年3月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話06-6876-2151

発行人 朝倉敬夫

編集委員 池谷和信(編集長) 櫻永真佐夫
川口幸也 庄司博史 山中由里子

協力 財団法人 千里文化財団

制作 株式会社社報堂

製版・印刷 アサヒ精版印刷株式会社

●本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係へ
●本誌掲載記事の無断転載を禁じます